

## フィールドワーク便り

### 砂漠体験記

#### —ナミブ砂漠のナラ採集フィールドトリップ—

飛 山 翔 子\*

アフリカ大陸南西部に位置するナミビア共和国の大西洋岸には、国名の由来ともなっているナミブ砂漠が南北に細長く広がっている。砂漠に強い憧れを抱いていた私は、ナミブ砂漠の真ん中に調査地を決めた。そんなところに人が住めるのかと疑問に思われるかもしれないが、ここでは季節河川・クイセブ川に沿って線状に集落が形成されている。ここに住む民族はトップナールといい、古くから「ナラ (!Nara)」と呼ばれる植物を利用し、暮らしてきた。

#### ナラとトップナール

「ナラ (学名 *Acanthosicyos horridus*)」はウリ科の多年生草本で、ナミブ砂漠の固有種である。完熟した果実は非常に濃厚で甘みが強く、とても美味しい。味をほかのものにたとえるならば…夕張メロンだろうか。生食のほか、トウモロコシ粉の練がゆに果肉のペーストを混ぜ込んで食べたりもする。種子も人々から好まれて食されており、村の人たちは大人も子どももポケットにナラの種を詰め込んでいる。そして自分のポケットが空にな



写真1 ナラの果実

採集期は毎年 12 月～5 月頃。採集量は近年の環境変化や気候変動の影響を受けて減少している。

ると「アライ オウドレ (種, ちょうだい)」と言って他の人に半分分けてもらうのだ。種の殻を奥歯で割る「カリッ」という小気味良い音が聞こえない日はなく、村のあちこちに殻が落ちている。その一方で、種は近くの街で売ると収入が得られるので、彼らにとって貴重な現金獲得源にもなっている。

8000 年以上もの食用の歴史がありながら、ナラは現在も栽培化されておらず、トップナールは毎年結実期になるとナラ採集 (フィールドトリップ) に出かける。昔は採

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 (現 NTC インターナショナル株式会社)

集期になると各世帯が「ナラフィールド」と呼ばれるナラの群生地へ家族総出で向かい、仮小屋を作ってそこで暮らしながらナラを採集していたが、現在は男性が2～5人のグループを作って、2週間ほどのフィールドトリップを繰り返す形態に変化している。私は調査のため、計3度のフィールドトリップに同行した。

### 愛車と月夜のドライブ

ナラフィールドは村から10 kmほど離れた場所にあり、移動にはドンキーカート（ロバ車）を使う。荷台の作りはなんともワイルドで、何度も補修した跡がある。運転席として木の板が一枚載っているが、固定されていないので走行中にずれたり落ちたりする。私は初めてドンキーカートに乗った時、怖くて泣いた。想像よりもスピードが速く、地面からの衝撃が直に伝わってかなり揺れるので、身体が投げ出されないように踏ん張っていなければならなかった。これまで生きてき



写真2 ドンキーカート

砂漠の厳しい環境下でも重荷を運んでくれるロバたちは、採集者にとって一番のパートナーだ。

た中で、あれほど命の危険を感じたことはない。天に祈りを捧げながら一刻も早い到着を願っていたが、なんと最後の最後で運転手と私が座っていた板が段差の衝撃で落っこちたのだ！荷台に乗っていた人たちは大笑い。私は半泣きである。ジェットコースターが大好きな私も、ドンキーカートのスリルには耐えられなかった。しかし恐ろしいことに、人間郷に入れば郷に従うもので、その後2、3回するとすっかり慣れて上手に乗れるようになり、時には自分で運転するまでになった。

とあるフィールドトリップへのお発日。私は朝から旅支度を整えていたが、なかなかゴーサインが出ない。その日は風が強く、砂嵐がひどかった。そわそわしている私に、居候先の父・ヘルマンは「風が止んだら出発しよう」と言った。ところが結局風は収まらず、日が暮れて夜になってしまった。「明日に延期か…調査も後手後手だし、これから大丈夫かな」と不安に思いながら寝る用意をしていると、ヘルマンが「ショウコ、そろそろ行くよ」と言ってきた。私は耳を疑った。時刻はすでに夜の10時を回っている。もちろん外は真っ暗だ。戸惑う私にヘルマンは空を指さし「やっと月が出てきたから」と言ってニヤッと笑った。ドンキーカートに荷物を積んで、私たちは10時半過ぎに村を出発した。初めは真っ暗と思っていたが次第に目が慣れてきた。この時運転していたフェダンは、進路が月に照らされるようにうまく方向取りをしていた。風はもうすっかり止んで、ただただ静かな夜の中に私たちはいた。真夜中に間近で見る砂丘は、昼とは全く違った印象で、

その向こうには何か別の世界が広がっているのではないかと思わせるほど神秘的だった。この時の3時間ほどの月夜のドライブを私は一生忘れない。

### フィールドトリップの必需品

ナラフィールドでの1日は、紅茶に始まり紅茶に終わる。村でも毎日朝食代わりに砂糖のいっぱい入った紅茶を飲むが、フィールドトリップ中の紅茶の消費量はそれではない。採集では役に立てることがないので、せめて紅茶くらいは私が淹れようと率先してやっていたのだが、あまりにも回数が多いので、しまいには自分が給茶機ロボットになったのではないかと錯覚するほどであった。彼らは濃い紅茶が好みで、ティーバッグは原則1杯につき1個使用。それなので25個入のティーバッグを3人しかいないのにたった2日足らずで切らせてしまったこともある。しかし無限にティーバッグがあるわけではないので、ストックがなくなったら、一度使ったものを干して再利用（二番煎じ、三番煎じ）したりもする。「そんな貧乏くさいことをするくらいなら、最初から節約して使ったほうがいい」と思って、私が3人分を1個のティーバッグで淹れたら、ヘルマンに「なんでまだたくさんあるのにそんなことをするんだ」となじられた。「いやいや、だって絶対後でなくなって困るでしょ。この前もそうだったし」と反論するが聞き入れてもらえない。

納得がいかない私は、策を講じることにした。この次のフィールドトリップの際、自分のリュックにティーバッグを1箱隠しもつ

て行ったのである。案の定、準備していった分は途中でなくなり、みんなが途方に暮れたところで「ジャジャーン！」と言って新しいティーバッグを出す時の優越感といったらない。歓声と賞賛の声に笑顔で応える。完全勝利に気分を良くした私は、とびっきり濃くて甘くて熱い紅茶を淹れた。

ところでなぜこんなに紅茶問題に真剣に取り組むのかというと、紅茶不足は私にとっての死活問題につながるからである。紅茶が切れると皆一様に機嫌が悪くなり、極端に口数が減る。そこではもう聞き取りができる雰囲気ではなくなってしまい、もっと困ったことには、ナラ採集もろくにせず、「もう帰ろう」となってしまうのである。ナラ採集の一連の流れを間近で見て経験して記録しないことには、私の研究が成り立たないので、必死だったというわけだ。そして実は紅茶と並んでタバコもナラ採集者にとっての必需品で、私は「隠しタバコ」も用意しなければならないのであった。

### 「リアル・トップナール」

ナラ採集は、フィールドを歩き回って果実をつけた株を探すところから始まる。見つけたらもぎ取ってひとまず近くにまとめて置き、数日後に改めてドンキーカートで回収に来る。キャンプにまとまった数を集められたら皮剥ぎ、繊維質を断ち切るための煮詰め作業、種の取り出しと続き、フィールドトリップ中にこのサイクルを2、3度回す。この中で最も大変なのは、初めの巡回・採取作業だろう。日中の気温は優に30℃を超え、午後



写真 3 ナラ採取の様子

以前は親から子へ受け継がれていた採集に関する技術や知識も、最近は共有されなくなってきている。

には強風で砂が巻き上げられて目が開けられないほど厳しい環境になる。そしてナラは生育とともに、根元に飛砂を溜める性質をもっており、古いものは 10 m 近く高さのある砂山（マウンド）の上に生育しているため、採集のためにはマウンドに登らねばならない。しかし足元の砂はどんどん崩れていき、途中でトゲのある枝に足を取られたりして思うように登れず、想像以上に体力を消耗する。周りに休憩できるような木陰もなく、喉の渇きは限界に達するが、水を携帯するのは私だけである。採集者たちは、ナラを食べて水分を摂るから大丈夫なのだという。

私は足手まといになりながらも、フィールドワーカーの意地で付いて回っていると、ある時、ヘルマンから白茶けた小片を見せられた。それは土器の破片だった。よく見ると周りにも同じようなものがいくつか転がっている。「コイコイポットだよ」とヘルマンが教

えてくれた。「コイコイ」とは、狩猟採集を生業とするナミビアの先住民族で、トップナールの先祖にあたる人たちのことだ。私は遙か遠い昔に思いを馳せた。コイコイ人はスプリングボックかダチョウか何かの大型動物を仕留め、この場所で火をおこして食事をしたのだろうか。もしかしたら彼らもまたナラを食べて渇きをしのいでいたのかもしれない。強く逞しい先人たちと同じ大地を踏みしめているんだ、という感覚がじわじわと身体に広がり、元気が湧いた。その後は段々と風が強くなり、最後には容赦なく砂が飛んできて顔も目も痛くなったが、私はヘルマンに遅れまいと必死に歩き続けた。

夕方、キャンプに戻ると疲れとともに達成感が感じられ、心地がよかった。するとヘルマンがやや遠慮気味に「鏡、もってる？顔を見てみて」と言ってきた。「なんだろう、そんなに疲れた顔してるのかな。いや、日焼けで赤くなっているのか？」と不安に思いながら二つ折りの鏡を開き、覗きこんでみて驚いた。…真っ黒！なんと砂が顔一面にこびりついていたのだ。この醜さは自分で見るのものなかなか耐え難い。ずっとこんな顔でいたのかと思うと、顔から火が出そうだった。一方ヘルマンは「これでショウコモリアル・トップナールだ」と笑い転げていた。私はゴシゴシ顔を洗いながら「新婚旅行でナミブ砂漠に来るのは絶対に NG」と心のフィールドノートに書き留めた。